

若手奨励研究 研究成果報告書（概要）

研究課題名：精神科訪問看護における看護師の困難さ～地方に従事する看護師に着目して～
研究者名：葛島慎吾

研究成果概要

地方におけるより良い精神科訪問看護につながる教育プログラム等の作成・実施を視野に入れて、下記のように地方に従事する精神科訪問看護を実施する看護師の困難さに関する実態調査を行った。

【目的】地方に従事する精神科訪問看護を実施する看護師の困難さの実態について、1. 地方に従事する精神科訪問看護を実施する看護師の困難さの特徴、2. 地方に従事する精神科訪問看護を実施する看護師の背景と困難さの関連、を明らかにすること。

【方法】地方 A 県で精神障害者に訪問看護を実施している看護師 187 名を対象に自記式質問紙調査を行った。同意の得られた対象施設に質問紙を郵送して対象者への配布を依頼した。調査内容は、対象者の背景と精神科訪問看護における看護師の困難さ（6 ドメイン 62 項目）に関する質問項目で構成した。分析は SPSS Statistics ver26 を用いて、単純集計および対象者の背景と精神科訪問看護における看護師の困難さとの関連について Spearman の相関係数の算出、Kruskal-Wallis 検定を行った。自由記載項目は、質的記述的に分析した。本研究は宮崎県立看護大学研究倫理委員会より承認を受けて実施した。

【結果】質問紙の回収数は 122（回収率 65.2%）だった。精神科訪問看護における看護師の困難さは、利用者への対応と地域の受け入れに関する項目が高い傾向にあった。また、対象者の背景と精神科訪問看護における看護師の困難さとの関連は、精神科看護経験年数や精神科訪問看護経験年数といった看護師自身の特徴だけでなく、24 時間対応の有無など勤務施設の状況も関連していることが明らかになった。自由記載項目の分析は、44 コードから「ケアの成果がみえず精神科訪問看護の導入がうまくいかない」「訪問のたびに利用者の状況に応じた判断や対応を求められ、利用者と考えを共有した目標設定が難しいために看護過程を展開しづらい」「勤務施設内外でスタッフ同士が利用者のケアに関する考えを十分に共有できず、ケアの質向上につながりにくい」「精神科訪問看護におけるケアの質を高めるために十分な内容・回数の教育体制が整備されていない」「利用者と家族が地域で力を発揮して生活するための地域の受け入れが不十分」の 5 カテゴリーが抽出された。

【考察・結論】本研究の結果から、まずは看護師が精神障害や精神障害を抱えて地域で生きる利用者の理解を深める必要があること、看護師が利用者の理解を深め看護師としての役割を明確にすることで施設内外のスタッフとの意見交換を通じたケアの質向上や地域の人々への対応の安定につながることで、地方であるからこそ可能となる地域に密着した看護師等のつながりのあり方を模索する必要があること、地方に位置することで生じている施設の特性に応じた工夫を看護師等のつながりの中で共有し、共に考えていく場を設ける必要があることが考えられた。

【Key Words】精神科訪問看護、看護師の困難さ、地方

若手奨励研究 研究成果報告書（概要）

研究課題名：男性の生きる力を育む性教育の検討（文献検討）

研究者名：河野義貴

男子は、妊娠が自身に起こる女子に比べ性の知識があいまいである。また、性行動が活発化しはじめる中学生への性教育が必要であると考えた。そこで、中学生男子の性教育の現状と課題を把握するために課題1の文献検討を行った。課題2では、課題1の結果から依頼を受けた学校の中学3年生を対象に性教育を実施し、その前後でアンケートを行い、実施した内容等について評価を行い、今後の研究活動への示唆を得る予定であった。

課題1 中学生男子の性教育の現状と課題（文献検討）

【目的】中学生男子の性教育について、母親は異性であるため男子の性機能や心理を説明することが難しい。また、父親は性教育を受けた経験が少ないため家庭での性教育は課題が多いことから、日本における中学生男子の性教育の現状と課題を把握することを目的とした。

【方法】倫理的配慮として、調査対象は、施設名、個人名が特定されないように匿名化・コード化された文献を使用した。

医学中央雑誌 web 版 ver. 5 で「性教育」「男子」「中学生」をキーワードとし、会議録を除き文献検索した。検索漏れを防ぐために年数指定は設けなかった。

【結果】医学中央雑誌で検索した結果、22 件が抽出された。そのうち研究対象が高校生である論文が1件、女兒・女性が2件、中国での研究が1件あり、尺度作成・文献検討がそれぞれ1件（合計2件）あり、それらの文献を除いて、合計16件を分析対象とした。

中学生の性行動の現状として「家族・友人関係が性行動に影響する」、性の情報として、友人や雑誌から情報を得る傾向にあり「不確実な性情報」と言える。また、「男子中学生は性の悩みを相談しない傾向」にあり、母親から性の情報を得たいが対応が不十分であり、父親が性教育を受けた経験がないこと、教師は学生との世代間のギャップや教師間での意見の相違から「父親・母親・教師の性教育の限界」がある事が分かった。一方で生徒と教師が求める性教育は「人格形成・他者との関係構築を目的とした性教育」であり、保護者は「子供を危険から守るための性教育」を望んでいた。

【考察】中学生は身近な大人への反発が強くなることや対人緊張が高いために孤立したり、相談をしない傾向にある。その傾向は年齢の高まりに比例するため、早期の性教育と知識を備えた第三者である専門家の性教育が必要である。

【Key Words】性教育 男性 中学生

【研究成果の発表など】

河野義貴・濱寄真由美・福永美紀，中学生男子の性教育の現状と課題（文献検討），第38回日本思春期学会，2019年

課題2 中学生男子への性教育の実施

性教育の依頼を受けた学校の中学3年生を対象にアンケートを実施し、中学生が希望する性教育の内容について、課題1の結果をもとに担当養護教諭と検討し、教育内容と資料を作成した。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、性教育の開催が中止となった。今後は、アンケートや聞き取りを行い、中学生の希望や学校の要望に合わせた性教育を実施したいと考える。